研究論文

大学で「周産期」について学ぶ意義

The Significance of Studying ‘Perinatal Period’ in University

神前裕子
Kouzaki, Yuko
聖心女子大学現代教養学部心理学科准教授

中野博子
Nakano, Hiroko
聖心女子大学非常勤講師

河合 蘭
Kawai, Ran
出産ジャーナリスト・写真家

はじめに

「周産期」とは，妊娠22週から出生後7日未満までの期間と定義されている。「周産期」は妊娠，出産という生命に関する時期であり，これらについて知ること，考えることは自分の生命，自分の子の生命，といったごく身近な命に関することを知ると同時に，人類という大きな観点ではすべての人の根本として重要な事象を知ること，考えることと思われる。しかし，我が国の教育においては，周産期，妊娠，出産，性教育に大きく踏み込んだ内容が教えられずに来ていたことが指摘されている（齊藤，2020；田代，2020）。そのため，他の先進諸国に比べて，例えば妊孕（にんよう）性（妊娠するための力）に関しても知識レベルが低いということが指摘されてきた（Bunting, Tsibulsky, & Boivin, 2013；青木・安田，2021）。以上のことから，周産期に関する正確な知識を持った上で，事象について自身の問題として考える機会も少ないと考えられる。

世界的に見れば，近年「セクシャル・リプロダクティブ・ヘルス／ライツ（性と生殖に関する健康と権利）Sexual Reproductive Health and Rights（SRHR）」が提唱されるとともに，将来の妊娠を考えながら女性やカップルが自分たちの生活や健康に向き合うための「プレコンセプション・ケア Preconception care」にも注目が集まっている（荒田，2023）。自身が出産をするかしないかに関わらず，周産期に関する正確な情報を持ち，またこれに対する多様な考え方も認識した上で，これからの自身の人生で何を選択し，どう生きるかを考えることは重要である。そのために現在不足しているこれらの領域について学習の機会が必要だという問題意識を筆者らは共有してきた。青年期，特に近い将来に自らの妊娠や出産についての選択を迫られる当事者である女子大学生と接する機会の多い女子大学の教員として，この問題は非常に身近であると同時に喫緊の課題であると思われた。

以上の背景の中で2022年度～2023年度にかけて，我々はこの問題に関する展示，教育に携わる機会を得ることになった。これらの問題に関する学習の機会は，医学や看護学，助産学を専攻する学生は専門家としての教育の一環として学ぶ機会が得やすいであろう。しかし同年代でも，それ以外の専攻の学生にとっては，周産期やその周辺の問題について学ぶ機会は限定されていると考えられる。そこで，展示や授業を行うこの機会に，さまざまな視点からの“周産期”に関わる事象を伝えることを通じて，学生自らが自分自身の妊娠や出産について知り，考える機会を提供することを考えた。以上の我々の取り組みの内容や経緯，学生の学びを振り返り，教育の効果や今後の課題について検討することを本論文の目的とする。

そこで，本論文では，1．本学で我々が企画して行った“世界から「命の誕生」を考える”の展示と，2．我々

が関わった三つの講義の内容とそれらを通じての参加者の反応を紹介し，その上で，３.これらの取り組みの意義について検証したい。以上を通して，４.今後の大学における周産期教育についての展望を述べる。

１.「世界から『命の誕生』を考える」展示

2022 年 10 月～ 2023 年 4 月にかけて学内学生だけでなく，一般の入場者も観覧可能な取り組みとして「世界から『命の誕生』を考える」という展示を行った。この展示は学内の会場を用いて開催されたものであるが，内容はウェブ展示（https://kyosei.u-sacred-heart.ac.jp/exhibition/2022_women_4/）でも公開された。本展示は神前・中野と，出産ジャーナリスト・写真家の河合蘭によって企画・実施された。内容については本誌 pp.116-136 でも紹介されているので，ここでは簡単に紹介する。

展示では，誕生の現状，出産の方法，妊娠出産時のサポートの国ごとの比較という三つの内容についての国際比較を行った。まず, 一つ目は, 命の誕生が実は国によって大きく異なるという現状の紹介であった。例えば，高開発の国々では少子化が進んでいるが，アフリカなど多産が続いている国々も多くあること，医療技術の進歩が進んだ国々では妊産婦や新生児の死亡率が低くなったが，いまだ死亡率が高い国や地域があることなどを紹介した。二つ目は，出産にまつわる方法や技術に関する国の違いであった。出産は人類共通だが，国によって出産方法や入院日数，サポートは大きく異なる。自然分娩が多い日本に対して, 欧米では無痛分娩が主流である一方, 中国をはじめとするアジア諸国においては現在帝王切開が多くなっている。また出産時の入院日数の国による相違，新型出生前検査などの扱いが国によって異なっているという現状を伝えた。三つ目は妊娠出産のサポートについてである。医師，助産師など医療者のサポートはとても重要なものであるが，さらに世界では我が国ではなじみの薄いドゥーラやネウボラ，クラームゾルフなどの支援者がいることを紹介した。

展示を見た学生からは,「私は今まで，理想のお産とは“母子ともに健康で生まれてくること”だと思っていた。しかし今回展示を見て，“産んでよかった”，“また産みたい”と思えるお産をすることが私にとっての理想のお産なのだと感じた。妊娠中何か健康的に問題になることがあり不安になり苦しく悩んでも，出産後に“産まれてきてくれてありがとう”と心から赤ちゃんに想い“これから一緒に頑張ろう”と未来へ歩いていけるように思えることが大切だと，今回の展示を見て感じた」（大学 2 年生）

「何故女性が，こどもを生むのに対して，幸せだという感情だけでなく，怖い，苦しい，つらいという感情を持つのかについて学ぶ事が出来たように思いました。自分が新しい命を宿すという事。そして，その命を責任をもって育てるという事。その責任の大きさと，命と向き合うまでの母が痛みや，検査，病気などを乗り越え，自分のからだを痛めながらも産むという責任と苦しみがあるからのように感じました。しかし，大変なことが多いにもかかわらず，子と向き合う母と，母と向き合う子の姿がありました。遺伝子を検査し，出生前診断をし，時には，少し小さく生まれて来たり，障害を持って生まれる事もある中での，母がこの子を産み育てるという大きな決断を感じたように思いました」（大学２年生）

などの感想があった。

観覧者は展示で伝えた情報から，広がりを持って，自分のこと，命の重さや子育ての責任などを感じとっていることが窺われた。

２．周産期に関連した講義

（1）2022年度　グローバル共生研究ⅩⅡ
『周産期の現場から命を考える』

この講義は，神前・中野・河合が企画し，妊娠出産に関わる基本的な事項も学びながら，多様な視点から妊娠出産について，自身の，あるいは社会のための周産期・命について考える視点を持ってもらうことを目指して学内の全学科学生を対象に行った。概要は,「人間の命が誕生するまでの妊娠出産には幾多のプロセスが存在する。そして，現代では周産期医療が発展し，不妊治療や出生前診断，新生児治療技術が向上，さらに胎児治療まで可能になってきた。しかし，こうした技術の進歩に，我々の気持ちはついていけているのだろうか。医療技術の進化，新たな状況・選択肢の登場に対して，それを受け取る私たちの側の意識・価値観に，さまざまな心理的葛藤，見解の相違（肯定的見方・否定的見方）が生じており，発展した技術の中で，妊婦などの心のケアが取り残されているという現実もある。本講義では，人類の誕生から変わらない妊娠・出産のプロセスと，現代の医療技術の発展やそれに伴う「心」の問題を併せて，私たちが命の誕生にどう関わっていくべきか，命とは何かについて周産期の現場に関するさまざまなテーマから考える。」とした。全 14 回の講義の内容は表１の通りであった。

最終回には学んだことを自由に話し合うグループ・ディスカッションの機会を設けた（図１）。

そこで示された学生のいくつかの感想を紹介する。

「この授業での学びは，出産時のみならず，今後の私の人生に大きく影響してくると感じました。出産は赤

表１　グローバル共生研究ⅩⅡ『周産期の現場から命を考える』の講義内容

1	オリエンテーション
2	周産期医療の現場
3	分娩方法
4	母乳育児と育児スタイル
5	周産期のメンタルヘルス
6	マタニティブルーズと産後うつ
7	周産期と精神医療
8	不妊治療と着床前検査
9	出生前検査
10	新生児医療とは何かー新生児医療の専門家よりー
11	新生児医療における生命倫理
12	周産期の心理臨床　対象喪失の視点より
13	周産期医療の専門家からみた妊娠出産ー複数の専門家によるディスカッションー
14	本講義のまとめ

図１『周産期の現場から命を考える』のグループ・ディスカッション

ちゃんを産むだけのことだと思っていましたが，出生前検査や産後うつなど出産の前後に関する新たな知識を得ることができました。また子どもができることが当たり前ではなく，不妊治療のことや，子育てとキャリアの両立のことも考えて人生計画を立てていく必要があるのだということを学びました。出産は幸せなことですが，大変なことや辛いこともあります。だからこそ，自分の子はかけがえのない存在なのだと感じました。そして女性に生まれ，子どもを産む権利があることにとても嬉しく思いました。子どもを授かり育てることには相当な体力と精神力が必要だと思います。妊娠の時だけでなく，今から自分の体を大切にし，なるべく健康な体で出産を迎えたいです。普通の授業では学べない妊娠，出産のリアルを学べました」（大学３年生）

「普通科だと周産期に関する内容はなかなか学ぶことができません。ですが，自分の人生の中で必ず選択肢として残る周産期の勉強をすることができ，今後の自分の方針になったように感じます」（大学３年生）

「妊娠，出産や命に関する教育の重要性を多くの人が必要だと感じていて，このような講義を学生のうちに受けることができたことはとても貴重なことだと改めて感じた。若いうちに妊娠や出産，家族の在り方について考える機会があることはこれからの人生を考えていく上でとても重要な役割を果たすと思う。そして，自分や他者との心の向き合い方を知ることができたこともこれからの人生を前向きに考えるきっかけになったと思う。辛い時や困ったときは私を支えてくれる場所や人がいることを心に留め，また目の前に悩みを抱えている人がいたらその人の支えに私がなれるようにこれから生活していきたいと感じた」（大学１年生）

本学は女子大学であり，今回の受講生は学内の女子学生に限られていたが，扱った内容は性別に関わらず必要な知識・情報であると考えられた。また多様な専攻の学生が周産期に関して出会う機会の少なかった妊娠や出産の実際についてだけでなく，不妊も含めた妊娠までのプロセス，出産前後のトラブル，あるいは出産後の親子関係も含めて学ぶ経験を通して，自らの比較的近い将来に出合う可能性のある事態についての考える機会を持てたのではないかと思われた。

以上のように，本講義は妊娠や出産の知識の習得にとどまらず，学生が命や自分自身の人生を考えるきっかけとなり，プレコンセプション・ケアとしての役割を果たしたと考える。

（2）2023年度 臨床心理学特講７『周産期を巡る心理臨床』

本講義では心理学科の学生を対象に，周産期領域での心理職の支援の実践について，基礎的な知識とともに紹介した。このことを通じて心理臨床家によるさまざまな支援の可能性について具体的に理解を深めるとともに考える機会を提供することを目指した。授業概要は，以下のようなものであった。

「周産期とは厳密には妊娠22週から生後7日と定義され，身体的な危機の生じやすい時期である。さらにこの時期の前後の妊娠前・妊娠・出産には予想外のアクシデントが生じやすい。一見幸せの象徴のような赤ちゃんの誕生とその前後の時期は，想像以上に心理的なストレスが生じやすい時期でもある。これまで長い間，医療領域では心理臨床家の多くが精神科や心療内科を中心にクライエントの支援に取り組んできた。しかし，周産期とその前後の時期は，身体的な問題を契機に予想外の事態に突然遭遇することも少なくなく，精神科，心療内科とは異なる特殊性を持つ。本授業では，以上のような正解の見出しにくい妊娠・出産・産後に関わる心理臨床家の専門性について探究することを目的にする。この目的のため本授業は，出産の領域を専門として取材経験豊富なジャーナリストの河合が妊娠前，周産期，産後に女性・家族が抱える現代的な問題について紹介，妊娠，出産事情の理解を深める。さらに新生児の最先端の医療現場で心理臨床家として勤務経験を持つ中野は大学病院の新生児臨床の現場における経験を紹介し，心理臨床家としてのアイデンティティを持ち新たな領域で取り組むべき課題とは何かについて提示する。

受講生が心理臨床の専門家を目指すか否かに関わらず，予想外の危機的状況の生じやすい周産期とその周辺の時期についての正しい理解を持つことで，危機に遭遇した際の支援について考える機会としてほしい。ここでの危機に遭遇した際の対処について検討する学びは周産期に限定されるものではなく，身近な人が危機に遭遇したり，自らが危機的状況に遭遇した際の回復の道筋を探ることに繋がるものと考える。」

全14回の講義の内容は表２の通りであった。

先述のように出産ジャーナリストと現場経験を有する心理学科で臨床心理学を専門とする教員のコラボレーション授業であった。出生前検査，不妊治療と着床前検査，分娩方法，母乳育児と育児スタイルに関しては，現場の取材経験や科学的データに基づいて河合が担当した。本授業においては，公認心理師として周産期にいかに関わるかという専門家としての視点を学んでいくために，具体的な出産やこれにまつわるさまざまな問題について，学生が正確な事実を理解した上で，最終回には，受講生が４～６名程度のグループでこれまで学んだことについて相互にディスカッションし，グループ討論について発表してもらい全体で学んだことをシェアする機会を設けた。

本授業自体は心理学科において心理学的支援に関わる臨床心理学的支援について考える機会を持つことも大き

表２　臨床心理学特講７『周産期を巡る心理臨床』の講義内容

1	オリエンテーション　周産期医療の現場における心理臨床
2	周産期の実際①出生前検査
3	出生前検査と家族の支援
4	周産期の実際②不妊治療と着床前検査
5	不妊と心理支援
6	周産期の実際③分娩方法
7	心理的支援の目指すもの
8	周産期の実際④母乳育児と育児スタイル
9	周産期医療における支援の実際
10	対象喪失の経験と心理臨床
11	Holding environment としての養育者の支援
12	新生児医療における生命倫理と心理臨床
13	NICU卒業後の子どもと家族の支援
14	振り返りとまとめ　最先端の医療領域における心理臨床家の専門性とは

な目的であったが，学生が周産期について知る授業でもあった。ここでは，本論文のテーマに沿って特に周産期についての授業を受講するに当たり，受講生がどのような期待を持ち，どのような理解を得たかを中心に学生の声を紹介したい。

初回の授業の際に学生に授業を受けたいと思った理由について質問した。授業の目的から臨床心理学的支援の理解を期待する言葉が多数見られたが，これと同時に特に妊娠を理解することへの期待も同様に多かった。特に妊娠，出産に関する期待について言及した学生の記述を紹介する。

「お産についての知識が全くなく，今後のためにも知識を身につけたいと思った」（心理学科３年生）

「これから先，友達などの周りの人が妊娠や出産を経験するときに何も知識がないよりかは周産期に一般的に起こることや心理的な支援の方法を知っていたほうがその人たちの助けになるかもしれないと考えたからです」（心理学科２年生）

「周産期に特化した授業が受けられるのは貴重だと思い，興味をもちました。また，私自身が経験するかもしれない周産期について正しい知識を学び理解しておくことは，これからの人生においても役立つだろうと考えたからです」（心理学科２年生）

「自身が女性であるということで，妊娠と深く関わりがあると感じたからです。女性の一生として選択し，経験する可能性のあることを知識として身につけたいと思いました」（心理学科４年生）

以上のように，大学２～４年生の受講生の多くが，将来自身も経験する可能性のある妊娠，出産といった周産期に関する知識をほとんど持っていないことを自覚していた。そして，心理学的支援について学ぶ目的に加えて，自身の近い将来のために周産期について学びたいことが受講の動機になっていたことが伺えた。

一連の授業の最終回には，授業を通じて考えたこと，疑問に思ったことについてその場で作ったグループに分かれてディスカッションを行い，その内容について各自で記述したものを提出してもらった。その中で得られた学生の振り返りをいくつか紹介したい。

「話し合いの中で特に共感したのが，授業を通して実際の現場の写真が見られたことについてでした。（中略）NICU 等で働いた人しか知ることができない現場でのお話を聞くことができたのが私自身でも，グループの中でも印象に残りました」（心理学科４年生）

「実際の出産の様子を見る機会はなかなかないため，貴重な時間だったと感じています。出産の写真や映像を見て，あらゆる形の出産があるのだと気づくことができました。江連さん（ゲスト講師）がおっしゃっていた『自分ベースで出産や子育てをする』ということを，自分や周囲の人が出産・子育てをする際には意識していきたいと思いました」（心理学科３年生）

「治療者に方向性を決めてもらうのではなく，クライエント自身で方向性や解決法を決めることは，治療するうえで大切なことだと感じました。クライエントが自分自身で治療の方向性を決めるためには，治療者側から情報を提供する必要があると授業で学びました」（心理学科３年生）

以上のような，自身の出産についてのイメージを初めて得られたこと，あるいは NICU で周産期に関わる仕事の紹介を通じて周産期に誰にも生じうるアクシデントやそこからの回復を手伝う仕事があることを知ったこと，さらに，出産や子育てについて受け身ではなく自身がよく理解したうえで選択したいと考えたことが示された。さらに，

「皆さんがどういったことを印象深く感じたのか聞くことができたのがとてもいい機会でした。特に，不妊対策の話を皆でした時に，不妊中にもこんなことをしてはいけないというもの（筆者注：禁煙，健康な食生活，やせすぎ・肥満を避けた適切な体重の維持，風疹予防などに努めることなどが必要）があるんだねと改めて再認識しました。それによってもっと不妊対策についてなど詳しく勉強してみたくなりました」（心理学科４年生）

と，特に周産期のテーマについて知識を得たうえで意見を交換し，考えたことをシェアすることを通じて視野を広げることにつながった様子が伺えた。

以上，先述のグローバル共生研究XⅡ『周産期の現場から命を考える』の授業での感想とも重複するが，未知の体験を初めて知ったことだけにとどまらず，これまで知る機会の少なかった周産期について実際に経験する前にあらかじめイメージを持つこと，これらの出来事に対して正確な情報を基に自身の求める方向性を能動的に考えるきっかけを提供することができたのではないかと考える。さらに最終回においてこれまでの経験を相互にディスカッションしたことにより，個別に感じていたことを他の人とシェアすることを通じて自分以外の人の持つ多様な考え方・感じ方を知る機会になったことも窺えた。心理学科における臨床心理学の授業であったことにより，今回は紹介を割愛したが支援する側としての視点から書かれた振り返りもかなり含まれていた。妊娠，出産について学ぶことを通じて，さまざまな可能性のあることを自分ごととして考える機会を持ち，専門家として，あるいは身近にいる人が苦しい状況にいる際に，支援される側に寄り添う姿勢についても考える機会となったことが窺えた。

（3）2023年度 総合現代教養演習『「出産と子育て」の多角的考察』

本講義は，学内の学科の枠を超えて（2023年度は，史学，教育，哲学，人間関係，心理学の5学科）多様な学科の教員が担当した。それぞれの専門領域から出産や子育てに関わる内容について講義した上で，学生が自らのテーマを考えて学科を超えた自らの選択するゼミに分かれ，各自の発表に向けて準備，成果の発表を行うというものであった。受講生も学科，学年を限定せずに募集した。以上を通じて，学際的に出産や子育てについて学び，かつ，自らが選択したテーマについて探索的に検討し，発表を行うというアクティブ・ラーニングの形式を用いた講義であった。本講義の概要は，以下の通りであった。

「「リベラル・アーツ」とは，自由な人間になるために必要な教養のことを言いますが，それはひとつではなく，いくつかの学問の知識をバランスよく学ぶことによって，はじめて身につけることができるのです（だから，"arts" と複数）。

女性であるあなたにとって，また社会全体にとっての大きな事業としての「出産と子育て（そして仕事）」の問題について，できるだけ複眼的に（広い視野から）考えるのがこの授業です。身近で具体的なテーマが，一見無関係とも見えるいくつかの学問分野の思考へと広がってゆくことを，この演習を通じて体感してください。

そして自分の意見を遠慮せずに述べ，友人や教員と意見交換する楽しさも経験してほしいと思います。」

全14回の講義の内容は表3の通りである。

学生は第7回までの講義で，出産と子育てに関する学際的な視点のレクチャーを受け，そしてその講義から自らの関心を追求し，第8回から第12回までの講義で自ら調べ発表ポスターを作成する。そして，第13，14回では学会発表と同様の形式で，ポスターの前に立ち発表および質疑応答に対応する形式をとった。

図2 『総合現代教養演習』の成果発表

例えば，2023年度の各ゼミの学生の発表テーマは，「母親の社会史」「子育て支援の現状と政策」「母性研究―母性の束縛から逃れ，自分らしくあるために―」「赤ちゃんと英語学習」「妊娠中の母体の心理変化」など多様であった。文献や先行研究，インターネットでの情報を調べるのみではなく，インタビューや調査を行った学生もいた。

表3　総合現代教養演習『「出産と子育て」の多角的考察』の講義内容

1	オリエンテーション
2	子育てと音楽：誰が、なぜ子守唄を歌うのか
3	臨床心理学的視点から見た出産、子育て
4	「女であること」を哲学する
5	過去の社会（多産多死の社会）における出産、子育て
6	現代家族と子育て：誰が子育てを担っているのか
7	教員によるパネルディスカッション
8	各教員ごとのゼミ　①
9	各教員ごとのゼミ　②
10	各教員ごとのゼミ　③
11	各教員ごとのゼミ　④
12	各教員ごとのゼミ　⑤
13	成果の発表　①
14	成果の発表　②

第13回，14回に実施された発表に対する感想では，

「以前から，高校の授業などで出生前検査について学んだことがありましたが，より詳しい内容を知ることができ，良い機会となりました。日本の検査を受けた人の中で，ダウン症の可能性が高いという結果が出た人の中絶の割合は約9割と，考えていた割合よりも多かったため驚きました。中絶の割合が6割というアメリカと比較すると，日本はその後のサポート体制や説明などが乏しく，もっと改善が必要なのだと感じるとともに，検査や中絶に対しての知識を皆が教養として学ぶべきだと思いました」（基礎課程1年生）

「赤ちゃんが音をどのように認識しているのか，また，音が子供の成長に与える影響について，順を追って話されていて，非常に分かりやすかったです。私の質問に対しても一生懸命考えてお答え下さり，理解が深まりました」（史学科3年生）

「赤ちゃんポストや匿名出産といった，悩みを抱えた母親たちのサポートを提供する施設の紹介から始まり，子の幸せとは何かを具体的なエピソードを加えて説明していたため興味深かった。発表者にとっての幸せとは，心から笑う事ができる心身の状態であるという。発表を聞き，私も親と子供の幸せを実現するために必要なものが何であるか考察をしたいと思った」（哲学科2年生）

「今までにあまり関わることのなかった絵画作品からの視点で書かれており，とても気になっていた。ポスターがとても見やすく，絵画でこんなにもはっきりと善悪が書き分けられていると知り，ただ作品を見るだけではなく，背景を知って観るだけでこんなにも見方が変わるんだと勉強になった。最後の悪しき母たちではよく見ると寂しげなテイストの絵画であるが，これは絵画で描かれている母親の変貌の描きものであると知り，母親の仕事を全うしていることが美徳であると長い間強調されてきていることの象徴だと思った」（教育学科3年生）

以上のように，「出産と子育て」というテーマを，史学，哲学，教育学，社会学，心理学から見るとどのようなことが考えられるのかという学際的な視点を持つとともに，自らのテーマを追求することにつながった。また発表により，多様な学科・学年の学生同士だけでなく，学生と教員がこのテーマについて双方向に学びを深めることになったと思われる。

3．周産期について学ぶことの意義

本論文では周産期に関わる展示と講義について紹介し，学生からの声を提示した。これらの取り組みの意義について，三つの視点から述べる。

（1）周産期の知識を得て，人生について考えること

学生は一様に周産期に関する知識不足を感じており，かつ今回の展示や講義の経験を通して，知識を得ると同時に正確な情報の取得方法についても学ぶことを通じて，近い将来の自分の人生，キャリアについて各々が考えていた。本稿では紙面の関係で一部の代表的な感想のみを紹介したが，参加者・受講者の多くに同様の記述が見られた。すなわち，周産期について学ぶことは，妊娠や出産などに関する正しい知識を獲得するということだけではなく，自分のキャリアパスを考える際の材料・指針になることが示されたと考える。

先にも示したとおり，我が国の教育においては長く性教育や妊娠・出産に関わる事項が避けられ，諸外国において教えられてきたことが，教えられてこなかった（橋本，2016）。近年はSNSの拡がりにより，さまざまな情報が溢れているが，このような時代であるからこそ教育の場において，正確な知識・情報を伝え，また自らも正確な情報を取得できる方法を持てるようになることを通じて，学生個々人が，自分がどのような人生を歩むのか，歩みたいのかを考える機会を提供することが教育として重要であること，今後の課題であることを改めて認識した。

（2）セクシュアル・リプロダクティブ・ヘルス／ライツ（Sexual and Reproductive Health and Rights：SRHR）の視点

セクシュアル・リプロダクティブ・ヘルス／ライツ（Sexual and Reproductive Health and Rights）は頭文字をとって「SRHR」と呼称される。日本語では「性と生殖に関する健康と権利」と訳され，すべての人の「性」と「生き方」に関わる重要なことを示している。この言葉はセクシュアル・ヘルス，リプロダクティブ・ヘルス，セクシュアル・ライツ，リプロダクティブ・ライツの四つの言葉の組み合わせで作られており，それぞれ表4に示した四つの意味を有している。

このうち，リプロダクティブ・ヘルス／ライツ（Reproductive Health and Rights）は，1960年代から「女性の健康」運動が広がったことを背景に，1994年にエジプト・カイロで開催された国際人口開発会議で提唱されたものである。現在では，SDGsの目標3「すべての人に健康と福祉を」や目標5「ジェンダー平等を達成しよう」においてもリプロダクティブ・ヘルス／ライツを保障することが記されている。

今回の展示および講義は，このSRHRを意識したものであった。我々が伝えたかったのは，すべての人にとって性と生殖に関して健康であることは重要であるということ，そして，性と生殖に関して我々一人一人が権利を持っているということである。女性の生き方は多様

表4　セクシュアル・リプロダクティブ・ヘルス／ライツの意味

セクシュアル・ヘルス	自分の「性」に関することについて，心身ともに満たされて幸せを感じられ，またその状態を社会的にも認められていること。
リプロダクティブ・ヘルス	妊娠したい人，妊娠したくない人，産む・産まないに興味も関心もない人，アセクシャルな人（無性愛、非性愛の人）問わず，心身ともに満たされ健康にいられること。
セクシュアル・ライツ	セクシュアリティ「性」を，自分で決められる権利のこと。自分の愛する人，自分のプライバシー，自分の性的な快楽，自分の性のあり方（男か女かそのどちらでもないか）を自分で決められる権利。
リプロダクティブ・ライツ	産むか産まないか，いつ・何人子どもを持つかを自分で決める権利。妊娠，出産，中絶について十分な情報を得られ，「生殖」に関するすべてのことを自分で決められる権利。

出典：https://www.joicfp.or.jp/jpn/know/advocacy/rh/より作成

化し，産むか産まないか，結婚するかしないかなど，自由に決める権利がある。選択は自らの手にあるが，しかし，正しい知識・情報を持っていないと，選択したこと，したいことをより良く進む方法・方向性を見つけられない可能性がある。教育として我々ができることは，正確な情報を選択できるための方法を伝えることも含めた情報を提供すること，多様な見方のあることを共有すること，そしてともに考えることではないだろうか。三つの講義では教員である我々が問いかける形で周産期に関わるさまざまな事象を提供し，ディスカッションや個人発表などの形で学生とともに考えてきた。学生は専攻，学年を超えて，多様な視点から周産期に関する事柄や生命に関わる事象を考える機会を得たように思われる。学生にとって本取り組みが，SRHR の視点に則り，自らの心身の健康について振り返り，権利を実感して，今後の生き方を考えるきっかけとなっていることを願っている。

（3）プレコンセプション・ケアとしての役割

我々の取り組みを通して，多くの女子大学生が妊娠，出産についての知識が不足していることを自覚するとともに，機会があればこれらについて学びたいと思っていることが明らかになった。我が国では妊娠，出産については，コマーシャルで流れる元気な赤ちゃんのイメージはあるものの，不妊の現状，妊娠，出産の実際，赤ちゃんの病気や子育てについての情報を知る機会のないことも窺われた。

急激な人口増に悩む国々や，我が国のように少子化の問題を抱える国のように，国によって抱える問題はさまざまであるが，いずれにしても妊娠，出産についての正確な知識を持ち，当事者がさまざまな選択肢の中から自身が自らの意思で選択できることが望まれる。

その意味で，“プレコンセプション・ケア”，すなわち，「適切な時期に適切な知識・情報を女性やカップルを対象に提供し，将来の妊娠のためのヘルスケアを行うこと」（荒田，2020，p.1723）は我が国においても喫緊の課題と考える。さらに荒田（2020）は，プレコンセプション・ケアについて「このケアは，妊娠を計画している女性だけではなく，すべての妊娠可能年齢の若者にとって大切なケアである。なぜならば，自分自身を管理して健康な生活習慣を身につけることは，健康のみならず，自己評価を向上させることによってより質の高い人生を送ることが可能となるからである」（p.1723）と述べている。以上に述べられている通り，青年期にある学生たちには非常に重要なケアであると思われる。

我々の取り組みはプレコンセプション・ケアを強く意識したものではなかったが，結果として，このケアにつながったと考えられた。しかし今回の取り組みにおいては，プレコンセプション・ケアに必須な項目（国立成育医療研究センター，2023; 図 3）となる，生活習慣や身体管理，栄養の問題については扱えなかった。このケアの重要性を考えれば，今後これらの内容も含めた心身両面を視野に入れた形に発展させることも検討する必要があると考える。

4．今後の大学における周産期教育

これまで述べてきた通り，我々は本学において周産期に関わる内容の取り組みを行った。全学的な講義（『周産期の現場から命を考える』『「出産と子育て」の多角的考察』）からは，妊娠や出産に関する正しい知識や情報，そして現実を知り，もっと勉強したい・知りたい，そしてこれらの知識を得て，自分の人生をどう生きるかという根本

□ 適正体重をキープしよう！
□ 禁煙する。受動喫煙を避ける。
□ アルコールを控える。
□ バランスの良い食事をこころがける。
□ 食事とサプリメントから葉酸を積極的に摂取しよう。
□ 150分／週運動しよう。こころもからだも活発に！
□ ストレスをためこまない。
□ 感染症から自分を守る。（風疹・B型／C型肝炎・性感染症など）
□ ワクチン接種をしよう。（風疹・インフルエンザなど）
□ パートナーも一緒に健康管理をしよう。
□ 危険ドラッグを使用しない。
□ 有害な薬品を避ける。
□ 生活習慣病をチェックしよう！（血圧・糖尿病・検尿など）
□ がんのチェックをしよう！（乳がん・子宮頸がんなど）
□ 子宮頸がんワクチンを若いうちにうとう。
□ かかりつけの婦人科医をつくろう。
□ 持病と妊娠について知ろう。（薬の内服についてなど）
□ 家族の病気を知っておこう。
□ 歯のケアをしよう。
□ 計画：将来の妊娠・出産をライフプランとして考えてみよう。

図3 日本でのプレコンセプション・ケアチェック項目（例）
国立成育医療研究センター（2022）より引用

的な問いに向き合う学生が多くいることが明らかになった。一方，心理学科の講義（『周産期を巡る心理臨床』）においては，臨床心理学から周産期医療へのアプローチも提示されていることから，臨床心理士や公認心理師といった心理専門職を目指し，専門家として周産期医療を支援したいという学生・大学院生の声も多く聞かれた。

以上のように取り組みに参加した多くが青年期にあり，社会に出る前の時期であるタイミングで周産期について学ぶことは，これからの人生についてよりリアルに考えることにもつながり，意義あることであったと考えられる。そして，我々教員の立場からは，より専門的で正しい知識，我が国や世界の現状を反映した内容を提供できることが重要であろう。神前・中野は心理学の立場で多くの臨床現場での支援の経験を持ち，河合は長く出産ジャーナリストとして周産期の現場と密接に関わり，取材と調査を重ねて現状を伝えてきた。展示には産婦人科医や新生児科医，助産師，ドゥーラなど多職種の人々の協力を得ることができた。今後の教育においても，周産期に関わる多職種の人々の協力，さらには受け手の側の経験など多様な人々の声を反映して，基本的な身体の仕組みから，妊娠出産のプロセス，それに関わる問題や現状（不妊治療，出生前検査，分娩方法，母乳育児等，社会保障制度，子育て支援など）を伝えていくことが必要と考える。

以上を通して，学生が自身の人生に向き合うだけでなく，より大きな視点で社会にとってどのようなことが必要であり，そのために自分にはどのような貢献ができるかについてまで思いを馳せることができたなら，より意義のある教育につながると考える。

引用・参考文献

青木真里・安田孝子（2021）「高校生のライフプランと妊孕性知識の実態調査」『女性心身医学』26（2），pp.189-195.

荒田尚子（2023）「プレコンセプションケアとは」『小児内科』55, pp.1723-1726.

JOICFP（2020）「セクシュアル・リプロダクティブ・ヘルス／ライツ（SRHR：性と生殖に関する健康と権利）とは」JOICFP. https://www.joicfp.or.jp/jpn/know/advocacy/rh/（2024年5月8日最終閲覧）

国立成育医療研究センター（2022）「プレコンセプションケアセンター」国立成育医療研究センター . https://www.ncchd.go.jp/hospital/about/section/preconception/（2024年5月8日最終閲覧）

齊藤英和（2020）「思春期のリプロダクティブ・ヘルス教育」*Hormone frontier in gynecology,* 27（3），pp.65-69.

田代美江子（2020）「性教育」『児童心理学の進歩』59, pp.175-204.

橋本紀子（2016）「セクシュアリティをめぐる国際的動向と海外の教育課程における性教育の取り上げ―日本と海外の性教育関連教科書の比較の視点から―」『保健の科学』58（6），pp.364-368.

Bunting, L., Tsibulsky, I., & Boivin, J. (2013). Fertility knowledge and beliefs about fertility treatment: findings from the International Fertility Decision-making Study. *Human reproduction*, 28(2), pp.385-397.